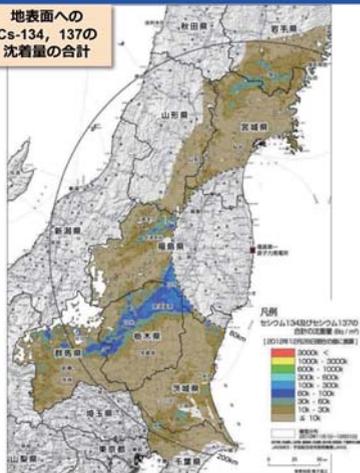


東京電力福島第一原子力発電所から
80km圏外の航空機モニタリング結果
(2012年12月28日現在の値に換算)

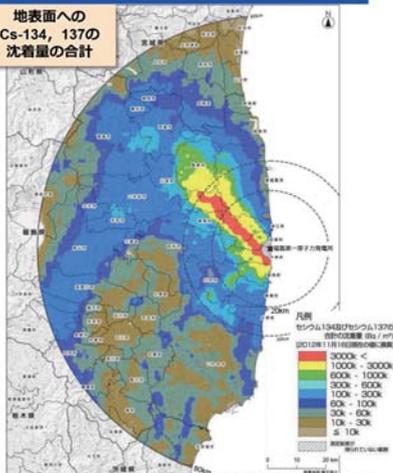
地表面への
Cs-134、137の
沈着量の合計



Bq/m² : ベクレル/平方メートル

東京電力福島第一原子力発電所から
80km圏内の第6次航空機モニタリング結果
(2012年11月16日現在の値に換算)

地表面への
Cs-134、137の
沈着量の合計



文部科学省報道発表 2013年3月1日

この図は、航空機モニタリングの測定結果を基に、福島県と近県における土壌表層中の放射性セシウムの沈着状況を示したマップです。

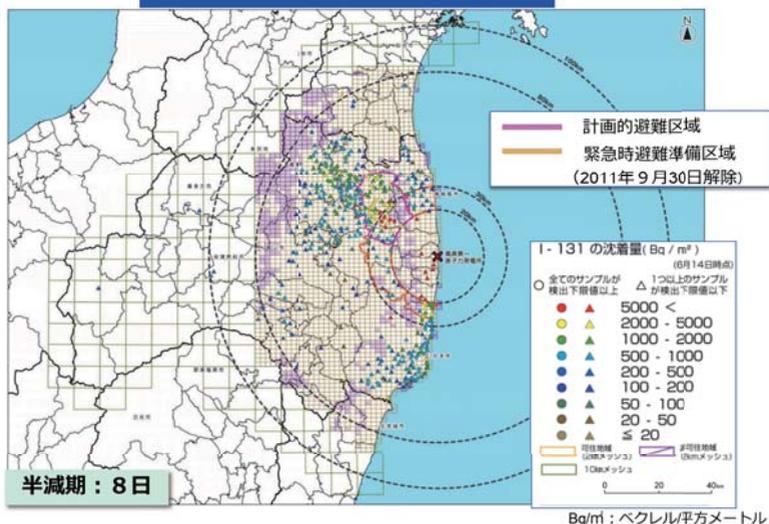
2012年10～12月に、降雨等の自然環境による影響を含めた放射性物質の影響の変化の状況を確認するために行われたものであり、マップの作成に当たっては、航空機モニタリングを実施した最終日である2012年11月16日時点と2012年12月28日時点の値に換算されています。

本資料への収録日：2013年3月31日

改訂日：2019年3月31日

ヨウ素131 (福島県東部)

ヨウ素131の土壤濃度マップ



文部科学省報道発表 2011年9月21日 (2013年7月1日一部訂正) ※2011年6月14日現在の値に換算

事故から3か月後の2011年6月に行われた国の土壤に関する調査では、東京電力福島第一原子力発電所から100km圏内で採取された土壤試料について、ヨウ素131 (I-131) の分析が行われました。

ヨウ素はセシウムと同様に、東京電力福島第一原子力発電所から北西へ帯状に沈着量が高くなっているのに加え、東京電力福島第一原子力発電所から南側の地域において、セシウムに対するヨウ素の比率が高い地域が存在しています。地域によって、放射性セシウムと放射性ヨウ素が異なる比率で地表面に沈着している理由としては、放射性プルームが放出された時期の違いによりヨウ素131とセシウム137の比率が異なっていることが考えられます。また、南方へ流れたプルーム中のセシウム137に対するヨウ素131の放出量の比率が相対的に多かったことや、地域により沈着の仕方が異なり北方で降雨沈着が顕著であったため、北方で土壤に沈着したセシウム137の放射能濃度が増えたこと等が考えられます¹。

1. 文部科学省、原子力災害対策支援本部「放射線量等分布マップの作成等に関する報告書 (第1編)」(2012年)

本資料への収録日: 2013年3月31日

改訂日: 2020年3月31日

福島県の環境試料 (東京電力福島第一原子力発電所事故直後)

飯館村村民の森あいの沢
(2011年3月17日採取)

雑草(葉菜) (Bq/kg)	
・ I-131	892,000
・ Cs-134	314,000
・ Cs-137	318,000

陸土(土壌) (Bq/kg)	
・ I-131	336,000
・ Cs-134	32,000
・ Cs-137	33,700

陸水(池水) (Bq/kg)	
・ I-131	2,480
・ Cs-134	443
・ Cs-137	476

採取場所	採取日	雑草(葉菜) Bq/kg			陸土(土壌) Bq/kg		
		I-131	Cs-134	Cs-137	I-131	Cs-134	Cs-137
二本松市東和支所	3月17日	152,000	107,000	110,000	35,800	5,440	6,230
飯館村柔剣道場	3月16日	1,150,000	546,000	549,000	151,000	22,600	25,100
福島市大波城跡	3月17日	429,000	283,000	292,000	156,000	16,700	18,000

Bq/kg : ベクレル/キログラム

文部科学省 「環境試料の測定結果」 2011年6月7日より作成

事故発生直後に行われた環境試料のモニタリングでは、土壌や植物からは高濃度の放射性ヨウ素と放射性セシウムが検出されました。

本資料への収録日 : 2013年3月31日

改訂日 : 2019年3月31日